

『許されざる者』

1992年／アメリカ／クリント・イーストウッド監督作品

「許されざる者」とは誰か？

会員 岡田 隆司 (47期)



『許されざる者』
ブルーレイ ¥2,381 +税
DVD ¥1,429 +税
ワーナー・ブラザーズ・ホーム
エンターテインメント

小学校5年生のときだったか、クラスの女子たちは皆、ませていて、Kさんは「ミッシェル・ポルナレフが好き」と言うし（お尻を丸出しにしているポスターを見せてくれた）、Sさんは「クリント・イーストウッドがタイプ」と語って眩しそうな目をした。その時の僕にはちんぷんかんぷんだったけれど、中学生くらいの頃から独りでも映画館に行くほどになり、イーストウッドの名も覚えた。

「荒野の用心棒」や「ダーティハリー」のタフガイ役者は、その後、映画製作や演出にも活躍の場を広げ、当初こそ“評価されざる監督”であったけれども、今や“巨匠”と呼ぶに誰も異議を唱えまい。作り続けるタフネスぶりに驚嘆する（私生活も盛んらしいけど笑）。

やはり「許されざる者 (Unforgiven)」をオススメします。

イーストウッド主演、監督。アカデミー作品賞受賞（1992年）。シンプルな西部劇を期待する人は裏切られる。様々な仕掛けが複雑に内包されている。

イーストウッド演じるウィリアム・マニーはかつて強盗や殺人を繰り返す“極悪人”として名を馳せていたが、妻と出会ってから改心し、農夫になる。ところがその妻に先立たれ、仕事もうまく行かず（飼っている豚も病気）、子供を二人抱えて、「どうしよう？」って状況。そこに、スコフィールド・キッドという若者がやって来て、「一緒に賞金稼ぎをしないか？」。金が必要なマニーはこの話に乗る。

マニーは友人のネッド・ローガンを誘う（演じるのは、名優モーガン・フリーマン）。ネッドも足を洗っていて、奥さんと暮らしていたのだが、旧友のこういう誘いって断れないもんですね。

マニーは最初、勘が戻らず、拳銃の腕もあやふや、馬に乗るのにも難儀する。「おいおい大丈夫かよ」という感じなのだが、“昔取った杵柄（きねづか）”。のみならず、それが彼の本質なのだろう、しかるべき時が来ると直ちに、腕の冴え、甦る。

結局、彼はそういう人間なのだ。農夫としては落ちこぼれだが、人殺しとして超一流。適所に在る人間には、運も味方する。「I've always been lucky when it comes to killing folks.」（俺は人を殺すとき、いつも運がいい）は、素敵な台詞。

さて、ネタバレを避けながら、本質をドカンと書くにはどうすべきか迷うところ、疑問文の形で締めくくろう、と思いつ（とはいえ、できれば、以下は映画をご覧になってからお読み下さい）。

マニーの奥さんはいったい、どんな人物だったのか？ 彼女のことを想像できるか否かで人類は二分される。

お墓に記された命日に注目。日付に作り手の真意が隠されている、と信じる（「硫黄島からの手紙」につながる）。

一人の女の顔が切られた話がいつの間にか、女の目がくりぬかれ、乳をえぐられた話に膨らむ。「イングリッシュ・ボブの伝記」は、嘘ばかり。物語を信じるな。

いったい誰が歴史を作るのか？ 勝者が創る歴史。ラスト、雨の夜の対決は、誰もが待ってた、いかした銃撃戦。殺人場面に快哉を叫ぶ僕ら。でも、カッコいい殺人なんて、本当にあるのか？ 物語を信じるな。（しかし誰かがこの世界の屋根を修繕し、雨漏りを防がなくちゃならないが。）

主人公のその後が字幕で示されるが、本当に信じてよいのか？ 物語を信じるな。